

# 研究ノート 16・17 世紀における 魔女・魔術文献の流通について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-05-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 牟田, 和男 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000247">https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000247</a>

## 研究ノート

# 16・17世紀における 魔女・魔術文献の流通について

牟田和男

- 1 問題の所在
- 2 ヴォルフガング・ヒルデブラント『自然魔術』
- 3 『魔女小論』とヨハン・ヤーコプ・ヴェッカー
- 4 『霊の楯』
- 5 これからの課題

## 1 問題の所在

ヨーロッパの魔女迫害の歴史には何層もの行為者が関わっている。迫害の犠牲者、潜在的犠牲者の周囲に暮らす隣人たち、被疑者を実際に尋問・審理して処断を決める裁判官、医術・呪術に関する専門知を有する医者、外科術師、呪術師、刑吏、公的審理のあり方を左右する実務法律家、住民の生活状況を悉知してモラルの指導にあたる聖職者、魔女犯罪の枠組みを提供している法学者・神学者・説教師・イデオログなど多様な行為者がそれぞれの仕方で介入して魔女迫害現象を織りなしている。そこには魔女や魔術についての特定のタイプの知識が人間集団ごとに共有され、またそれが他の人間集団に伝わっていくという知識の伝達が決定的な意味を持っている。

知識の伝達には口頭と文字、図像やその他の表象物があるだろうが、冊子としてまとめられた印刷物こそが、知識の系統だった伝達方法としては最も凝縮された形態であろう。ところで魔女や魔術をめぐる書物の中でも従来多く研究対象になってきたのは知識人が著した学術的悪魔学あるいは裁判実務の本だったと言える。代表的なものがハインリヒ・インステイターリスの『魔女への鉄鎚』であろう。他にもジャン・ボダン『悪魔狂』、ペーター・ピンスフェルト『魔女と魔術師の告白について』、ニコラ・レミ『悪魔崇拜』、マルティン・デルリオ『魔術の探索6書』、ピエール・ド・ランクル『墮天使とデーモンの無節操一覧』、ハインリヒ・シュルトハイス『詳細なる手引き』、ヨハン・ヴァイアー『悪魔の眩惑』、フリードリヒ・シュペー『犯罪への警告』等々、思いつくままに列挙するだけでも数多くに

のぼる<sup>(1)</sup>。これらは一部を除いて著者もはっきりしており、版による異同も比較的少なく、大学鑑定にも引用され、またそれをめぐっての論争も盛んに行なわれてきた。

しかし魔女迫害現象に関わる行為者は幅広い裾野を持ち、かつそれぞれの間で互いに異質性を抱えている。魔女・魔術観念が流れ込んでその相互滲透や力学の中から特定の歴史現象としての魔女迫害が生み出されるのだとすれば、実際の読者層が限られていた悪魔学や魔女の論争書以外にもさらに視野を広げる必要があるだろう。広範な読者層を対象にした魔女についての平易な解説本から魔術の実用書まで、16世紀後半から多くの書物が出回っていたが、魔女や魔術をめぐる書物のうち、ここではそうした素人向けの書物に光を当ててみたい。

とは言え以下で考察を加えるように、これらは元々の著者が誰なのかははっきりしない上に、版を重ねる度に新たな内容が付け加えられて改変されていることが稀ではない。しかも著者と編者、翻訳者、情報提供者、印刷者の区別も曖昧で、先行する文献を拾い集めて一冊の本に仕立てることも通例であった。こうした書物に関する先行研究は乏しく、流通経路の解明もほとんど進んでいない。また特にカトリック教会の禁書目録に掲載されているものなどは地下出版の形で出版者も明記されていない上、行商人を通じて売られることも多く、さらには利用者同士の手渡しによっていたと想定されることもあって全貌を把握することは不可能に近い。しかしそれでも特定の本が版を重ねて印刷されていたという事実は、出版業の側も売れることを計算し、読者が存在することを前提としているわけである。魔女についての高度な思弁ではなく、災厄を避け幸福を得るための実用的知識や平易

<sup>(1)</sup> 従来より日本でも悪魔学に対する関心は高く、多くの研究業績が出されている。ここでとても紹介しきれないものではないので、代表的なもののうちごく限られた一部だけの言及に留める。まず総合的なものとして黒川正剛氏の著書『魔女とメランコリー』新評論(2013)及び『魔女狩り—西欧の三つの近代化』講談社(2014)は魔女迫害時代の初期から終焉までを視野に入れており、著者独自の視点から今日最もよく目配りの効いた悪魔学の紹介になっている。その他に平野隆文『魔女の法廷—ルネサンス・デモロジーへの誘い』岩波書店(2004)、同「ピエール・ド・ランクル：『墮天使とデーモンの無節操一覽』：「デモロジー＝旅行記」に見る境界侵犯への恐怖(その1)」青山フランス文学論集 復刊13(2004), 55-114頁; 同「ピエール・ド・ランクル：『墮天使とデーモンの無節操一覽』：「デモロジー＝旅行記」に見る境界侵犯への恐怖(その2)」青山フランス文学論集 復刊14(2005), 127-148頁; 菊地英里香「近世初期の悪魔学—J・ボダンの時代の裁判官たち(レミ、ボゲ、ランクル、デル・リオ)の言説」古典古代学2(2010), 9-39頁, 同「J・ヴァイアー『悪魔の眩惑—魔女は罪人か、病人か?』古典古代学1(2009), 29-51頁, 同「中世末期の妖術師像—『蟻塚』から『鉄鎚』へ」古典古代学4(2012), 1-21頁; 田島篤史『『魔女への鉄槌』の製作状況と作品構成—初版から第17版までを中心に—」96(2017), 55-74頁, 同『『魔女への鉄槌』第18版から第24版の作品構成』千里山文学論叢97(2017), 1-22頁; 『『魔女への鉄槌』第25版から第29版の作品構成』千里山文学論叢98(2018), 35-61頁; 法律家についての本格的な考察は前田星「ヨーロッパ近世刑事司法の中の魔女裁判：ハインリヒ・フォン・シュルトハイスの『詳細なる手引き』を手掛かりにして」(1)北大法学論集70-4(2019), 1-36頁, 同70-5(2020), 17-60頁, 同70-6(2020), 55-92頁, 同71-1(2020)79-116頁, 同71-2(2020), 49-87頁, 同71-5(2021), 209-251頁, 同72-6(2022), 79-123頁, 同73-4(2022), 21-65頁, 同74-2(2023), 41-69頁。

な解説を求める読者の存在は漠然と予想できるが、誰がどんな本をどのように読んでいたかといったところにまで踏み込んで検討するにはまだ先が長い。確かに想定読者以外の層もかなり本を所有していたし、所有と本の流通・情報共有とは一致しないことから、出版の書誌情報に頼るだけではその読者の読書実践を把握することはできないだろう<sup>(2)</sup>。こうした難点は承知の上で、しかし日本では素人向けの魔術文献が真面目な考察の対象として取り上げられることはまずなかっただけに、そもそもどういう文献が問題になり得るのか、まずは出版状況と内容の特徴をもとに概略を把握しておくことから始める必要がある。

本稿では16・17世紀にアルザス地方で流通していたと思われる書物3点に限定して、現時点で明らかにできることを紹介することにより、当時の書物と知識のあり方について問題提起をしたい。その際著者の思想の独自性を基準にした思想史的方法ではなく、もっぱらテキストを起点にしたアプローチではあるが、書物の生産を流動的な共同作業のネットワーク、さらには読者の需要を当て込んだ情報の発信と受容の循環として捉える可能性を探りたい。

## 2 ヴォルフガング・ヒルデブラント『自然魔術』

1645年1月にアルザス中部の帝国都市オーバーエーンハイムで1人の男の魔術疑惑について証人尋問が行なわれた<sup>(3)</sup>。この町での魔女迫害は当時既にそのピークを過ぎていた。件の男の名はトーマス・ヤーコプ、当時町に駐屯していたフランス軍に所属する兵士である<sup>(4)</sup>。肉屋の親方ハンス・シュミットは長患いで医者に診てもらったが埒が明かなかった。それでヤーコプのところに相談に来たのである。ヤーコプは患者に右腕を差し出させ、脈を強く押さえると腫れてきたのを見て「こりゃ駄目になってる」と言った。シュミットは驚愕して「どうにもならんのか」と聞いた。ヤーコプは何が必要なのかうちに帰って本を見てくると答えている<sup>(5)</sup>。そして2グルデンの金を要求して、それでシュトラスブルクの薬局から薬を取り寄せた。証人尋問の記録にはその処方も添付してあったらしいが、今は

<sup>(2)</sup> ロジェ・シャルティエ「読書と「民衆的」読者—ルネッサンスから古典主義時代まで」シャルティエ、カヴァッロ編『読むことの歴史—ヨーロッパ読書史』大修館書店2000年、387-406頁。

<sup>(3)</sup> Les Archives municipales de la ville d'Obernai, FF 20a, Verhör wegen Thoman Jacoben Hexamerß soldatenß ahn jetzo in der garnizon Oberehenheim.

<sup>(4)</sup> フランス軍はこの町に既に10年以上駐屯しており、ヤーコプは現地雇いの兵士だったと思われる。

<sup>(5)</sup> ebd. „gesagt, seÿe ihme vergeben worden, woruf er m. Hannß vbel erschrockhen vnd gefragt, ob er dann ihme nitt helfen könde? Der Thomaß geantworttet, ja, wolle heimgehen vnd in seinem buch sehen, waß er darzue brauchen müeße“.

失なわれている。ヤーコブは処方された薬にガマガエルの内臓を加えた飲み物を患者に飲ませた。シュミットはひどい汗をかき、胃から豆のような白い球を30個ほど吐き出した。いずれにせよこれが功を奏したのか、シュミットはみるみるうちに回復したのだった。

数日後シュミットの所にやって来たヤーコブは、誰があんたをこんな目に合わせたのか知りたいかと聞いた。誰だか見当がつかないとシュミットが答えると、ヤーコブは鏡を覗き込んで、悪さを仕掛けた女性の容姿や年齢まで詳細に物語った。名前だけは知らなかったの、町に出た際仲間の兵士から名前を聞いてそれをシュミットに伝えている。シュミットによればその女の牛を解体した折に葡萄酒を振る舞われて飲んだところ、その後病気になったのだという。どうやってその女のことを知ったのかとシュミットに問われたヤーコブは、鏡に映ったのだと答えている<sup>(6)</sup>。ここには村の魔術師・魔女発見人が一般的に用いる詐術があると見て間違いなからう<sup>(7)</sup>。ヤーコブは明らかにこの女について事前に情報を仕入れているのだ。民間の魔術師・魔女発見人は顧客の疑惑を特定の対象に向けるために、核心をぼかしながら意味ありげなヒントを少しずつ与えていく。そして自分の技を属人的なものとして神秘的なベールで覆い、顧客を繋ぎ止めるのである。しかし同じ魔女発見と言ってもヤーコブの場合は従来型のそれとは違っている。ここで注目すべきは彼が自分の技の源泉が書物にあることをあっさり認めていることである。しかも彼が作った治療の飲料には薬局による調合が介在している。鏡を使った透視との組み合わせは彼が伝統的な民間魔術師の芸を引き継いでいることを示しているが、それ以外の点については彼の特権的な地位を保証しているのは端的に文字が読めたことであり、魔術についての属人的なカリスマ性は随分と薄められている。

ヤーコブの治療に魔術の胡散臭さを嗅ぎ取った市当局は彼に件の本を提出させた。そしてその詳しい書誌情報を記録している。明らかにその本はこれまで司法官が目にしたことはなく、そしておそらくはその存在自体をも知らなかったであろうと思われる。だからこそこの書物に例外的な関心を寄せて記録しているのである。これに対して3人の証人はその注意をもらって鏡の透視術に向けていて、これに重点を置いた証言をしている。この点で市当局と民間の意識との差は際立っている。

さて問題の本はヴォルフガング・ヒルデブランド『自然魔術』というものである。著者

<sup>(6)</sup> ebd. „Er Thomas geantwortet, soltt er sie nitth kennen, er habe sie ja in seinem spigel gesehen, wie sie gestaldth“

<sup>(7)</sup> vgl. Rainer Walz, Hexenglaube und magische Kommunikation im Dorf der Frühen Neuzeit. Die Verfolgungen in der Grafschaft Lippe, Paderborn 1993, S. 212-217.

のヒルデブランドは1571年頃に生まれ1631年から1635年の間に没したテューリングンの法律家で帝国公証人の肩書きがある<sup>(8)</sup>。この本は初版が1610年にダルムシュタットで出され、その後次々に版をを重ねて1704年までに27版を数えるという大ベストセラーになり、特に初版から10年ほどの間はほとんど毎年のようにどこかで出版されている<sup>(9)</sup>。またここからの引用、抜粋、実際の応用も含め、実に20世紀に至るまで最も利用される魔術文献の一つとしての地位を獲得したのである。ヤーコプが持っていたのは1625年にイエーナで出版されたもので、4巻から成っている<sup>(10)</sup>。内容は概ね第一巻が人間の肉体と精神に関する事、第二巻が動物に関する事、第三巻が植物に関する事、第四巻が鉱物や水や火に関するものとなっている。したがってこれはいわゆる悪魔学の本ではなく、自然界の事物を扱った百科事典的性格を持つ書物である。これが人間や家畜の治療、事物の変成とその効果に関する具体的な知識を提供していたのである。

このジャンルと言え、これも大ベストセラーになったジャンバティスタ・デッラ・ポルタの『自然魔術』が思い起こされる<sup>(11)</sup>。これは1558年に初版が出て以来大好評を博し、1589年の全20巻の新版に至ると各国語に翻訳されて欧州全体にその名を轟かせた。「自然魔術」というジャンルの根本にあるのは、自然は秘密に満ちており、しかもその性質を模倣し利用することで人間の役にたつ結果が得られるという考えである。この本が権威的著作の引用よりは実地の観察と実験による知見に大きな比重を持たせていることは著者とその成立の周辺事情からも確認されている<sup>(12)</sup>。ヒルデブランドの本も髪の色め方、動物の捕まえ方、消えるインク等々個々の実用的知識においてデッラ・ポルタの影響を強く受けている。

民間魔術師のヤーコプは『自然魔術』の全巻を持っていたのかそれとも特定の巻だけだっ

<sup>(8)</sup> Klaus-Dieter Herbst, Art.: „Hildebrand, Wolfgang“, *Bibliographisches Handbuch der Kalendermacher von 1550 bis 1750*, URL: [https://www.presseforschung.uni-bremen.de/dokuwiki/doku.php?id=hildebrand\\_wolfgang](https://www.presseforschung.uni-bremen.de/dokuwiki/doku.php?id=hildebrand_wolfgang) (最終閲覧: 2023.09.28)

<sup>(9)</sup> Karl-Peter Wanderer, *Gedruckter Aberglaube: Studien zur volkstümlichen Beschwörungsliteratur*, Frankfurt a. M. 1976, S. 182-186.

<sup>(10)</sup> Wolfgang Hildebrand, *Wolffgangi Hildebrands new augirte weitverbesserte und vielvermehrte Magia Naturalis: Das ist Künst und Wunderbüch: Darinne [n] begriffen wunderbahre Secreta, Geheimnisse/ und Kunststücke/ wie man nemlich mit dem gantzen Menschlichen Körper/ zahmen und wilden Thieren/ Vogeln/ Fischen/ Ungezieffern und Insecten ... wunderbarliche Sachen verrichten ... kan; Beneben erzehlung viler wunderlichen Dingen/ so hin und wieder in der Welt gefunden werden / Allen Kunstbegierigen ... zu sonderlichen Gefallen ... gantz new in Druck geben. Durch Wolffgangum Hildebrandum Gebensens. Tyingetam, Jena 1625.*

<sup>(11)</sup> G・デッラ・ポルタ『自然魔術』青土社（1990）。

<sup>(12)</sup> William Eamon, *Science and the Secrets of Nature: Books of Secrets in Medieval and Early Modern Culture*, Princeton 1994, pp. 195-203; デッラ・ポルタは魔女の軟膏についての見解によってボダンとヴァイアーの論争にも巻き込まれている。Jean Bodin, *De la Démonomanie des sorciers*, Anvers 1590, p. 399; Johann Weyer, *Witches, Debits, and Doctors in the Renaissance: Johann Weyer, De praestigiis daemonum*, Binghamton 1991, p. 225.



たのかは分からないが、第一巻には愛の魔術を仕掛けられたり性的不能にされた場合の対処法に続いて、「魔女の打ち込み」に対してどうやってこれを防ぐかについての章がある<sup>(13)</sup>。「打ち込み (Geschoß)」というのは、魔女は人間の足やその他の部位に皮膚を切開することなく灰、毛、糸、豚の毛、魚の内蔵その他のものを打ち込んで害をなすと考えられており、ヒルデブラントの本はこれに対する処方箋を提供しているのである。こうした観念は15世紀から広く行き渡っており、魔女術の被害者の治療に際して様々な物質が体内から出て来たという報告がしばしば見られる<sup>(14)</sup>。ヤーコプの治療を受けたシュミットの体からは数十個の球が出て来たという記述からも、ヤーコプが参照したとすればこの章であったろう。こうした魔女の打ち込みに対抗する処方としてヒルデブラントはパラケルススを引いて植物や水銀、珊瑚等を使ったやり方を紹介している<sup>(15)</sup>。知識人の間では毀誉褒貶の激しかったパラケルススは、しかし文字の読める市井の人々の間ではその名が広く知られており、そうした読者を相手にする出版では大いに利用価値があるものだった。その結果商業出版においては大量のパラケルスス偽書が生み出されることになる<sup>(16)</sup>。ここで問題にすべきはパラケルスス本人の筆になるものかどうかというその真贋ではなく、偽書も含めて当時これがパラケルススのものだとして通用していた事実の方である。

「自然魔術」というジャンルの系譜を詳細に調べ上げた民俗学者のポイカートは、この本が17世紀に登場した「家父長の書」の系列に位置付けられるとしている。彼はオットー・ブルナーの所説を批判的に受け継ぎながら、ギリシア語由来の「オイコノミカ」が今日的な意味での経済だけではなく家の経済、しかも奉公人を含めた家を統率する家父長の支配に関する技術であったことを確認する。そこでの基本的な観念は採算性ではなく生計であり農業社会に生きる人間に有用な知恵であった。17世紀以降に出た「家父長の書」はこうしたもっぱら農業社会に必要な生活の知恵の記述を多く含みながら、新しい都市社会の生活に適応した知恵の事典としての意味を持つ。ポイカートはその代表例をヒルデブラントの『自然魔術』に見ている<sup>(17)</sup>。ところで面白いことにヒルデブラントの『自然魔術』では、ヤーコプが用いたような鏡や水晶による透視は、悪魔の業として否定されていることである<sup>(18)</sup>。ヤーコプはこの技をあるイタリア人から習ったと白状したが、魔術的实践の

<sup>(13)</sup> Hildebrand, *Magia Naturalis*, Buch 1, Blt. 44r-45v.

<sup>(14)</sup> Alexandre Dorlan, *Notices historiques sur l'Alsace et principalement sur la ville de Schlestadt*, t. 2, p. 202-203.

<sup>(15)</sup> Hildebrand, *Magia Naturalis*, Buch 1, Blt. 44r.

<sup>(16)</sup> Wanderer, S. 170-176.

<sup>(17)</sup> Will-Erich Peuckert, *Gabalia: ein Versuch zur Geschichte der magia naturalis im 16. bis 18. Jahrhundert*, Berlin 1967, S. 296-320.

<sup>(18)</sup> Hildebrand, *Magia Naturalis*, Buch 4, Blt. 24v.

現場では書物の知と口伝えの情報が混合して、魔術師はその都度の状況に応じて使い分けていたと見るのが妥当だろう。

ヒルデブラントの『自然魔術』は冒頭で天空と地上界の照応・感応関係についての説明はあるものの、あとは自然の秘密についての説明は後景に退き、断片的な知識の羅列になっている。それだけではなくさらに大きな特徴は、他の書物からの雑多な引用で大幅に嵩がを増えていることである。魔女の打ち込みの章で言えば、打ち込みに対する対抗手段の説明は僅かで、その後には魔女を見分ける特徴についてパラケルススの参照指示が続き<sup>(19)</sup>、その後水審についてゲーデルマンの所説が延々と引用され、章全体の内容としてはちぐはぐになっている。しかもこの章の直後には付論として『魔女への鉄鎚』からこれまた長い引用がなされているのである。ポイカートはヒルデブラントのこの本を断片的な知識の寄せ集めだとしており、随所に見られるパラケルススへの参照にしても偽書からのものが多く、ヒルデブラントはおそらくパラケルススの思想を理解もしていなかつただろうという。しかしヒルデブラントの思想云々よりもデッラ・ポルタの亜流ではあったかもしれないが、需要が大きかったからこそこうした書物が版を重ねたという事実の方に注目したい。

やはりヒルデブラントのこの本について考察したテレは16、17世紀の読者層状況について、ラテン語の学術知識を交わし合う知識人とドイツ語の笑話や職匠歌の世界に生きて「学」とは無縁の一般庶民が互いに交わらずに共存しているような時代が終わりつつあったことを指摘する<sup>(20)</sup>。言わば断片化された実用的知識と自然が持つ不思議な現象を個別具体的に呈示するような書物が新しい読者層からは求められていたのである。

イーモンは当時の印刷業の業態に注目して、それが知識人の文化と民衆文化との相互交渉、相互接合の役割を果たしたことに注意を促している<sup>(21)</sup>。17世紀は技術的知識についてのハウツー本の出版ラッシュの時代であった。手工業の知識は伝統的に仕事場の中で、口頭と実地体験によって伝えられるものであり、その教育方法は「見よう見まね」で、核心部分が秘伝、秘密として親方の人格的カリスマと結びついていた。印刷業という新しい業種は複数の工程に異なった技術が必要であり、金細工、木版画、外科術など異業種からの

<sup>(19)</sup> Theophrastus Bombast von Hohenheim/Paracelsus, Fragmentum Libri De Sagis, Et earum operibus, in: ders, Neundter Theil der Bücher vnd Schrifften des Edlen/Hochgelehrten vnd Bewehrten PHILOSOPHI vnd MEDICI, PHILIPPI THEOPHRASTI Bombast von Hohenheim PARACELSI genannt..., Basel 1590, S. 241-262 (hier: S. 248-249). 魔女についてのこの断章も一部を除いてパラケルスス本人の手稿によるものではなく、その追随者の手になるものであることが、既に早くズートホフによる校訂で確認されている。Karl Sudhoff, Versuch einer Kritik der Echtheit der Paracelsischen Schriften, 1 Theil: Die unter Hohenheim's Namen erschienenen Druckschriften, Berlin 1894, S. 403.

<sup>(20)</sup> Joachim Telle, Die „Magia naturalis“ Wolfgang Hildebrands, Sudhoffs Archiv, QUARTAL, Bd. 60, H. 2 (1976), S. 105-122., S. 106.

<sup>(21)</sup> Eamon, p. 112.



参入組が多かった。そしてそこで働く職人も伝統的な職能組織の中で訓練を受けてきたのではなく、熟練するためには平易な言葉による理解可能な知識の伝達が求められる。工房での技術に関するやり取りのスタイルは顧客との関係にも影響を及ぼしている。印刷業はますます閉鎖的になるツンフトとは対照的に市場と読者の需要に敏感に反応する体質を備えていた。また印刷業以外にも当時都市を中心に広がりつつあった原料の供与と出来高賃金による新しい生産システムは、伝統的なツンフト規制からはみ出す非熟練の手工業者を多く生み出すことになった。こうした人々は知識人ではないにしてもドイツ語の読み書きはでき、実用的な知識を求めていたのである。

実用的な個別的知識のカタログという性格とともに、ヒルデブラントの本にはもう一つその呈示のスタイルに特徴があったことを付け加えておかねばならない。それは実用書でありながらも当時の学術的著作の引用スタイルを真似ていることである。権威的著作の引用を判断の指標にする読者層が存在し、この本はそうした読者層をも相手にはしていたのである。本の表題は『自然魔術－技と驚異についての書物、ここには人間の体、家畜と野生動物、鳥、魚、害虫、昆虫、あらゆる植生、植物…の驚くべき秘密が書かれている…云々』と非常に長いものだが、その驚異や秘密の内奥についての説明よりは実用的知識の提供に重点が置かれている。かつ由来のはっきりしないものも含めて中世以来の多くの文献が権威付けのために引用されているのである。

15世紀終わりから16世紀にわたるシュトラスブルクの印刷業と書籍の出版状況を量的調査を基に綿密に検討したクリスマンの仕事は、当時の読者と知識状況を知る上で今なお大きな価値を持っている<sup>(22)</sup>。16世紀初めまでのラテン語出版優位の状況は宗教改革以後ドイツ語の出版物が爆発的に増えて逆転する。宗教改革直後は印刷業者の個人的信念にも支えられて、プロテスタントの論争的書籍が急増するが、その後は落ち着きを見せ、16世紀後半からドイツ語書籍の大きな部分を科学的な内容の本が占めるようになっていく。クリスマンによれば16世紀前半の科学に関する文献は大きく2つに分極化していた。ラテン語で数学書を書くようなアカデミーの教授たちと土着文化に根ざしてドイツ語で素人向けに書く執筆者たちである。前者の権威の源泉は古典古代のギリシア、ローマ、そして中世のアラブの文献であり、その権威は相変わらず疑問に付されることはなかった。後者は

---

<sup>(22)</sup> Miriam Usher Chrisman, *Lay culture, learned culture: books and social change in Strasbourg, 1480-1599*, New Haven, London 1982.

教会、学校、聖堂参事会といった制度的基盤を持たずに活動していた軍医、薬業者、その他の技術者であった。この当時、都市の市民層の間では人間の体、自然の動植物、自然現象に対する関心が高まっていた。そしてドイツ語で書かれたこうした科学書は分析的・理論的というより記述的なものであり、修辞学や弁証法の素養がなく概念的思考に慣れていない新しい読者層に、知識のカタログを提供する役割を果たしていた<sup>(23)</sup>。そうした読者が求めていたのは特に実用的な知識であり、それは動植物や鉱物など個々の自然現象に対する細かい観察と結びついていた。人間の病気や怪我の解説と治療、家畜の病気や不妊への対処法、薬草の効能、葡萄酒の保存、火薬の配合の妙など、実際にモノの性質を掴み、実地に応用するという試行錯誤の実験精神が随所に見られる。髪の毛を特定の色に染める方法、酸っぱくなった葡萄酒を甘くする方法、長時間歩いても疲れぬコツなどヒルデブラントの『自然魔術』には多くの実践的知識が盛り込まれている<sup>(24)</sup>。無論今日では受け入れ難いものも多数あり、例えば便秘を治す方法として、死人の腕か脛の骨を取り、その中空部分に患者の排泄物を詰めて蠟で蓋をし、水に沈めると効果があると記されている<sup>(25)</sup>。しかしそうしたものも含めて生活の知恵への知的需要は、ルネッサンスの自然哲学を起点としながら通俗化した科学として広がっていった。言わずもがなであるが魔術は科学的知識でもあり同時に技術でもあったことは改めて銘記しておく必要がある。

ところでやはりクリスマンの指摘するところでは、16世紀には印刷業者と学者世界は密接な交流があった。印刷業にとってカトリック教会や大学の学者は相変わらず手堅い受注先であったが、同時に彼らを添削や校正のために雇っていたことに注意を払うべきである。そしてまた翻訳や古典の新版などを手がけるように印刷業の側からも作家に働きかけていた。よく知られた例がフランソワ・ラブレーの作品やジャン・ボダンの『悪魔狂』の翻訳で知られるヨハン・フィッシャルトである。彼は義兄弟の関係にあった印刷・出版業者ベルナル・ジョバンに家に住んで校閲係として働いており、その作品も多くジョバンが出版している<sup>(26)</sup>。16世紀後半になると従来の二極化した情報発信層は互いにその射程を延ばす形で結果的にその差は縮まっていく。知識人が幅広い一般読者向けに本を書く動きはモラルの領域では早くから始まっており、セバステイアン・ブラントの『阿呆船』がその代表格であろうが、世紀半ばからは新しい読者層に向けた実用書、通俗科学解説書が出回るようになった。そうした読者層は財産によって生活できる存在ではなく、生業を持ち、

<sup>(23)</sup> Chrisman, p. xx-xxii.

<sup>(24)</sup> Hildebrand, *Magia naturalis*, Bd. 1, Blt. 10v-12v

<sup>(25)</sup> Hildebrand, *Magia naturalis*, Bd. 1, 47v-48r.

<sup>(26)</sup> Chrisman, p. 24-25; Art. Jobin, Bernhard, in: *Deutsche Biographie*. <https://www.deutsche-biographie.de/sfz37297.html#ndbcontent> (最終閲覧: 2023.10.03)

したがってその学的知識への欲求はすぐれて実用的方面を指向していたのである。

さてこのヒルデブランドは他にも魔女について論じた書物も出版している。ここで注目したいのは『ゴエティアかテウルギアか、あるいは魔術のベテンの記録、暴露、解明、審理、そして処断』という1631年に発行されたものである<sup>(27)</sup>。表題から白魔術と黒魔術を峻別すべきことが説かれていることが分かるが、魔女についてその行ないと本質、淫行、由来から荒ぶる軍団や取り替え子に至るまで触れられている。そして「すべてのフォクト、シュルトハイス、管区長、管区代理、世俗の剣と統治の執行者」にとって読む価値のあるものだと謳っていることから、犯罪としての魔女術の見極め方と対抗措置を扱って世俗の司法権者に有益な情報を提供するものだというわけである。

### 3 『魔女小論』とヨハン・ヤーコプ・ヴェッカー

『ゴエティアかテウルギアか』はしかし表題にもあるようにヤーコプ・フライヘル・リーヒテンベルクという人物が記録したものを医者ヨハン・ヤーコプ・ヴェッカーが手を入れたものだという事になっている。元になった底本は1575年にヴェッカーが編纂した『魔女小論』というもので、ヒルデブランドの本はこれを大幅に引き延ばして増量したものである<sup>(28)</sup>。編纂者とされるヴェッカーは1528年にバーゼルで生まれ、1544年からバーゼル大学で医学を学び始め、1557年には弁論術の教授になると共に医者としての活動を始めている。その後1566年にコルマールに市医として呼ばれ、1586年にそこで死去するまで医師として働いた<sup>(29)</sup>。また妻のアンナ・ヴェッカーは夫の死後、養生食を中心にした料理書を著したことでよく知られている<sup>(30)</sup>。

彼の最初の出版は1559年にイタリアの医者で作家のアレッシオ・ピエモンテーゼ（ラ

<sup>(27)</sup> Wolfgang Hildebrand, *Goëtia, vel Theurgia, sive Praestigiarum magicarum descriptio, revelatio, resolutio, inquisitio, & executio: Das ist, Wahre vnd eigentliche Entdeckung, Declaration oder Erklärung fürnehmmer Articul der Zauberey Vnd was von Zaubern, Vnholden, Hexen, derer Händel, Art, Thun, Lassen, Wesen, Buelschafften, Artzneyen, woher sie erwachsen, vnd ihrer Machination. Deßgleichen Was von WechselKindern vnd Wütenden Heer zu halten sey*, Leipzig 1631.

<sup>(28)</sup> Johann Jacob Wecker, *Hexen-Büchlin das ist, ware Entdeckung und Erklärung aller fürnehmster Artikel der Zauberey [ohne Titelblatt]*, [s.l.] 1575 (<https://diglib.hab.de/drucke/122-phys-2s/start.htm>).

<sup>(29)</sup> Johann Heinrich Zedler, *Grosses vollständiges Universal-Lexikon aller Wissenschaften und Künste*, Bd. 53, Leipzig/Halle 1747, Sp. 1772.

<sup>(30)</sup> Anna Weckerin, *Ein köstlich new Kochbuch von allerhand Speisen... Mit allein vor Gesunde: sondern auch vnd fürnemlich vor Krancke/in allerley Kranckheiten vnd Gebrästen: auch Schwangere Weiber/Kindtbettenrinnen/vnnd alte schwache Lute/ tünstlich vnd nützlich zuzurichten vnnd zugebrauchen*, Amberg 1598.

テン語化してアレクシウス・ペデモンターヌス)が1555年にイタリア語で著した『秘密の書』の翻訳である。これは当時の自然界に関する知識、それも特に実用的な知識を詰め込んだカタログのようなものである。このピエモンテーゼの著書自体非常に多くの版を重ねて6ヶ国語に翻訳された大ベストセラーであったが、そもそもピエモンテーゼなる人物が実在したのかどうかについても今日完全な決着は見えていない<sup>(31)</sup>。いずれにせよこの『秘密の書』は出版界におけるヴェッカーの大成功をもたらすことになる。彼はその後も生前だけでも19の版をラテン語、ドイツ語、フランス語で出しており、その死後もヴェッカーの名前で出された『秘密の書』は1750年まで実に53版に上る<sup>(32)</sup>。彼はその他に解毒法、人間の器官、水・油・葡萄酒についての本など医学書、養生書を著している。実に多産であるが、だがどういう意味で「多産」だったのか、ヴェッカーの『秘密の17書』を中心にその出版について検討したツヴァイフェルはヴェッカーが出版にあたって数多くの協力者を持っていたことを明らかにしている。親戚で医者の特オドル・ツヴィンガー、出版業者のピエトロ・ペルナ、そしてバーゼルの市参事会員で法律家のザムエル・グリナエウスの3人が中心的な協力者であった。グリナエウスはヴェッカーのために書籍の収集・情報提供を、ツヴィンガーは文章の修正・校訂、そしてペルナは出版のための校閲と一応の役割分担はあったが、それぞれが出版用の文章に介入しており、最終的な作品はこれらの共同作業の結果である。そして著者というのはこの共同作業につけられた名前、記号、商標のようなものであり、それがヨハン・ヤーコプ・ヴェッカーだったと理解すべきだという。しかも先行文献の収集、編纂、提示にあたってはそれだけでなく文献情報の提供者、翻訳者、通信伝達者、校閲者、出版のための原稿閲覧・活字配列者など多く人物の共同作業が必要となる。その一々の過程で各人の解釈が作品の中身に介入している<sup>(33)</sup>。というのも例えば翻訳者が翻訳を専門にすることはほとんどなく、翻訳対象の分野と同じ専門であることがほとんどで、著者と翻訳者は相互に入れ代わり得る状況だったからである<sup>(34)</sup>。ピエモンテーゼの『秘密の書』はこうしてヴェッカーによって増量され彼らの色に染め上げ

<sup>(31)</sup> Zweifel, S. 179-180. 実はこの本は1582年に禁書に指定されることになるが、その危険性を予感した著者で地図制作者のジロラモ・ルッシェリが架空の偽名を用いたのではないかという説が有力である。

<sup>(32)</sup> Zweifel, S. 266-272. 『秘密の書 (De Secretis)』はピエモンテーゼの最初の翻訳では『秘密の6書』として出版されたが、その後『秘密の7書』、やがて『秘密の17書』になり、これが標準となるが、その後も16書や18書と記した本も出版されている。

<sup>(33)</sup> 例えば妻のアンナ・ヴェッカーは夫のために通信の使者として働いており、夫の死後はその解毒法の出版に主体的に関わっている。Zweifel, S. 74-75.

<sup>(34)</sup> 翻訳者と著者、編集者との相互移動については Julia G. Martins, «Les livres de secrets imprimés et traduits en Europe : la circulation des secrets italiens entre 1555 et 1650», dans : *Encyclo. Revue de l'école doctorale ED* 382 (2015), p. 145-164.

られ、ヴェッカーの本として流通していくことになった。1580年代後半からは表題からピエモンテーゼの名前も落ちることが多くなる。

ツヴァイフェルは幾つもの先行研究を引きながら、当時の「著者」概念が今日のそれとは大きく違っていたことをヴェッカーの作品に即して論じている。今日「著者」であることの指標はその発想の独自性である。当時も著者の独自性の概念がなかったわけではないが、それは先行文献群の組み合わせ、配列の仕方の中に表われているとされており、少なくとも編纂本に関しては出版に至るまでの人的・物的なネットワークを著者として捉えるべきだという。近代以降の「著者」概念は独自の作品を生み出したものが「著作権」としてそれを所有するという観念に連なっている。しかし当時の作品所有概念は原稿の紙という物質的なものであり、テキストの内容ではなかった。そして何よりも編纂作品が世に負う責任というのは、それを具体的に出した者ではなく、そこに集められた先行文献の権威に関するものだと考えられていたという。先行文献の権威こそは編纂本の価値を保証するものであり、したがってできるだけ多くの先行文献を提示することがその本の価値を高めるのであり、また責任もその先行文献に帰せられるのである。ヴェッカーはツヴィンガーへの手紙で、もっと多くの著述家の作品が手に入れば自分の本はもっと量が増えただろうと、分量を増やすこと自体が自己目的であるかのように執着している<sup>(35)</sup>。ヒルデブラントの場合もそうだが、分量の寡多は本の価値を左右する一つの指標ですらあった。そのため内容の体系性が二の次にされることすらあった。さらに今日の所有権概念としての「著作権」はその侵害としての剽窃と対になっている。当時も剽窃の概念はあったが、それは法的権利の侵害と言うよりもっと漠然とした道義的なものであり、先行文献を形式上不適切に使用したような場合である。一旦印刷されて世に出たものは、たちまち公共財として利用できるという考えが支配的であった。印刷業者同士でも剽窃の非難合戦はよく見られたが、市場での売れ行きこそが何にもまして優先された。シュトラスブルクの印刷業者クリスティアン・エグノルフは図像の剽窃のために同業者から訴訟を起こされたが、結局は勝訴している<sup>(36)</sup>。

この問題はそれ自体非常に興味深いが、ここで深入りすることはせず簡単な紹介だけに止めて、ヴェッカーの『魔女小論』に戻りたい。ヴェッカーの名前が出ているのは1575年に出版されたものであるが、今日ヴォルフエンビュッテルのカール・アウグスト公図書館に保存されている1575年版には題名の表紙が欠けており、ダニエル・フォン・ヴァルデッ

<sup>(35)</sup> Universitätsbibliothek Basel, Frey-Gryn Mscr II 4: Nr.326; Zweifel, S. 66.

<sup>(36)</sup> Eamon, pp. 110-111; François Rtter, *Histoire de l'imprimerie alsacienne aux XV<sup>e</sup> et XVI<sup>e</sup> siècles*, Strasbourg et Paris 1955, p. 314-315.



ク伯への献辞をヴェッカーが書いていることによって彼の編纂によるものであることが分かる<sup>(37)</sup>。しかしこれには1545年頃に出された版があって、題名は『魔女小論－魔術の眞の発見と説明ないしは解説の記事、そして魔法使い、妖術女、魔女、夜の危害から守ることについて…取り替え子、荒ぶる軍団…すべてのフォクト、シュルトハイス、管区長、管区長代理、世俗の剣と軍勢を持つ統治者にとって読むべき価値のある本…高貴なるヤーコプ・フライヘル・フォン・リーヒテンベルクがその牢から見聞きしたことを…』という長いものである。最後の部分に編纂者として「そして今学識ある博士によってまとめられ、詳細に述べられたものである」と記されている<sup>(38)</sup>。ここにはヴェッカーの名前は出てこない。出版が1545年だとすればヴェッカーがバーゼルで学業を始めて1年後の若干17歳であり、彼が編纂して出版したにしては若すぎる。この『魔女小論』はヴェッカーの没年にあたる1586年にアブラハム・ザウルの編纂で出された『魔法使いたちの劇場』の中にもヴェッカーの作品として収められており、ここでは最後の部分が「ヤーコプ・ヴェッカー博士により世に知らされた」となっている<sup>(39)</sup>。1545年版にある「学識ある博士」というのが誰であるのかははっきりしない。おそらくヴェッカーは既に存在していた先行文献をほとんどそのままの形で自分の名前を出したのではないかと推測される<sup>(40)</sup>。また情報提供者とされるヤーコプ・フライヘル・フォン・リーヒテンベルクなる人物も今のところ同定が困難である。

ざっとした中身であるが、およそ魔術は実際に存在するのかという問いから始まって、魔女を表わす幾つもの名前とそれぞれの定義に続いている。魔女の妖術には3つの要素つまり神の定め、魔術師たる人間、そして悪魔が必要である。人が魔女になっていく道筋として、憎しみ、妬み、肉欲、悲しみ、などの素質が元になっているが、それらは生まれた時から天界と呼応しており「上昇の星 (Ascendent)」に狙われた者が成長に従ってそれらの否定的な素質を増長させて魔女になっていくのである。そしてそうなるのは男より女が

<sup>(37)</sup> この献辞は1575年の版のみにあるが、『魔女小論』を収録しているオムニバス本『魔法使いたちの劇場』を編纂したアブラハム・ザウルがヴァルデック家の一家系であるヴォルラート2世の家庭教師を勤めていたことと関係あるかもしれない。

<sup>(38)</sup> Hexen Büchlein, das ist, ware entdeckung vnd erklärang oder Declaration fürnämlicher artickel der Zauberey, und was von Zaubern, Unholden, Hengsten, Nachtschaden, Schützen... Allen Vögten, Schulthe... [s.l.] ca. 1545.

<sup>(39)</sup> Abraham Saur (Hrsg.), Theatrum De Veneficis. Das ist: Von Teuffelsgespenst Zaubernern und Gifftbereitern, Schwrtzkünstlern, Hexen und Unholden, vieler fürnemen Historien und Exempel, ..., Frankfurt am Main 1586, S. 306-324; ザウルについてはFriedrich Wilhelm Strieder, Grundlage zu einer Hessischen Gelehrten und Schriftsteller Geschichte seit der Reformation bis auf gegenwärtige Zeiten, Bd. 12, Göttingen u.a. 1799, S. 207-215.

<sup>(40)</sup> 1545年と1575年の版は多少の言葉遣いの違いはあるが、ほぼ同一の内容である。



多い。魔女が悪天候を起こしたい時には棒に結び目をつけてひもを四方に引き、その方角を槌で打つと上昇の星がその地へ飛んでいって嵐を起こす。動物に変身するには悪魔の助けを借りて粘土を捏ねてその形にすると自ら変身できる。棒や動物に乗って飛んだりするのは子供を煮た脂で軟膏を作りそれを塗ると上昇の星が風を吹かせてそれに乗って飛べる。また皮膚を傷つけずに有害なものを体内に入れるといった悪行をなす。他の人間を動物の姿に変えてしまうことについては著者はそれが悪魔が作り出す幻影であるのか、それとも現実に起こることなのか、判断を控えて読者に任せている。好んで食べる食事の性質に人間も似てくるのと同様に、自然はそれ自体変化するものであるから、自然の長い変化を悪魔が短時にすることができるかもしれない。しかし姿を変えられた場合でも人間は人間の本質のままであり続ける。牛乳盗みの魔術にも言及しており、これは悪魔が牛から盗んだ牛乳をすばやくかつ見えないように魔女の糸巻きや斧の先から注ぐので、魔女は自分が魔術で牛乳を搾ったと勘違いするのである。また魔女や魔法使いが未来について予言できるのは、未来を知っている悪魔が自分の都合のいいように作り出した眩惑を哀れな魔女が信じているに過ぎない。

星辰の霊とも言える上昇の星と悪魔とが説明抜きでほとんど同義語として使われていることから、この小論は神学的な理論の基礎づけを示すよりは、既に流通していた具体的な魔女のイメージを網羅してコンパクトにまとめあげたものに過ぎないと言える。魔女裁判の自白調書に盛られている犯罪構成要件はすべて一応網羅しているが、むしろ重点は占い師への相談、牛乳魔術、動物への変身、突然の痛みや体の不調、そして少なくとも都市の裁判記録には決して登場しない「荒ぶる軍団」など、住民からの告発の動機になる具体的な害悪魔術や彼らの間に共有されていたと思われる魔術信仰と日常の実践に関わる記述の方にある。また牛乳を鍋で煮て棒で打つ、蠟で形作ったものを傷つけるといった共感魔術をも紹介している。「魔女の打ち込み」や「荒ぶる軍団」、そしてそもそも星辰の支配についての記述はパラケルスス（偽書）のものと符号しており、その影響を強く受けているのは明らかである<sup>(41)</sup>。そして巷で信じられ実践されていた魔術に対する批判が際立っている。ヒルデブラントの『自然魔術』と同じくこの『魔女小論』の中でも未来の透視術、占いなどは悪魔の力を借りているものだとして拒絶されている。プロテスタントにおける予言や占いへの峻拒の文脈でヴェッカーの本を捉える研究もあるが<sup>(42)</sup>、この点についてはさらに検討が必要だと思われる。

<sup>(41)</sup> Paracelsus, *De Sagis*, S. 256, 261-262.

<sup>(42)</sup> Jason Coy, *A Christian Warning: Bartholomaeus Anhorn, Demonology, and Divination*, in: Kathryn A. Edwards (ed.), *Everyday Magic in Early Modern Europe*, Burlington 2015, p. 132.

司法権者に向けた言葉であるが、魔女の疑いをかけられた者への対処として強制力による厳しい措置は魔術に対して魔術で対抗しようとするものであり、無実の者を無理に自白させるやり方だとしてこれには懐疑的である。魔女の害悪を防ぐために有効なのは、祝福、聖水、塩、薬草、福音の言葉、鐘の音などであり、また特定の上昇の星には特定の植物や石、例えばクマツヅラ、オウショウヨモギ、珊瑚などが効果がある。魔女は夫や子供に無愛想で冷たくなるので、母本人だけでなくその子供を見れば母が魔女であるかどうか見分けがつく。

最後の節では祝福と祈りについて述べているが、神による祝福と悪魔のペテンを区別しなければならない。魔女や悪魔から身を守り災難を避けるには信仰が一番である。神に祈ることと悪魔の力を借りることを混同してはならない。迷信深い人々は傷を治したり血を止めたりするのに馬鹿げた文句を唱えたりして、傷が治るとますますその迷信を深く信じ込んでしまう。しかし治癒するのは無意味な文句の効能ではなく自然物の性質によっているのである。迷信に囚われた人々が家畜が狼に襲われないように、病気が治るようにと被造物に祈り、しばしばそれが効果を現わすが故に靈験あらたかだと信じられているが、しかしそれは悪魔が術策を用いてそう信じ込ませているのである。真の祈りは神に対してするものであり、悪魔にではない。悪魔を信じてそれに祈る魔女は死に値するが、司法権力の担い手は騙された哀れな者を罰しないように慎重に見極めなければならない。悪魔に対抗するには神の力をおいて他になく、被造物は不幸を避けるために被造物自身や悪魔の力を崇めてはならない。最終的にこの小論は処方箋として信仰の言葉、摂理と自然の性質にかなった物による治療を推奨している。この書籍は全体として魔女の具体的特徴と魔女が引き起こすとされる現象の記述に重点があり、言わば外形的な特徴から魔女の輪郭を描き出すものだと言える。そして魔女が人間の持つ否定的な素質を星辰の影響の下で増幅させた存在だとするなら、信仰の言葉によって治療は可能である。明らかにパラケルスス風の魔女観念を彷彿とさせながら、この小論全体を通してアリストテレス、プリニウスなど古代の学者、アウグスティヌスなどの教父は引用されるものの、悪魔学書については唯一『魔女への鉄鎚』だけしか登場しない。パラケルススあるいはその追随者の魔女論は知識人の悪魔学論争にはほとんど影響を及ぼすことがなかった<sup>(43)</sup>。しかしこの『魔女小論』の内容が民衆生活の観察から多くの知見を引き出してアカデミズムの医学に対する代替医療の可能性を示したパラケルススあるいはその賛同者に大きく依拠しており、そして民衆的

<sup>(43)</sup> Peter Mario Kreuter, Paracelsus (Theophrastus Bombast von Hohenheim), in: Lexikon zur Geschichte der Hexenverfolgung, hrsg.v. Gudrun Gersmann, Katrin Moeller und Jürgen-Michael Schmidt, in: historicum.net, URL: <https://www.historicum.net/purl/45zst/> (最終閲覧 2022 年 9 月 1 日, 現在はリンク切れ)。

な魔術の実践への厳しい警告を含んでいるということ、そして裁判権を行使する者へ語りかけているということは、この小論の想定読者についてある程度の推測を可能にさせてくれる。第一級の知識人ではないにしてもおそらくは中小都市や農村で裁判の行方にも影響力を持ち得た在地エリート層ではないかと思われる。

この『魔女小論』は大成功を収めた『秘密の書』のように多くの版を重ねたものではなかった。しかし魔女迫害への賛否両論も含めた悪魔学の便覧とも言える1586年のアブラハム・ザウル編『魔法使いたちの劇場』にこの『魔女小論』が収められているということは、当時この文献がよく知られていたであろうことを示している。しかしこの『魔女小論』の影響力はこれだけに止まらない。前述のようにヒルデブラントの『ゴエティアかテウルギアか』はこの『魔女小論』の章立てをそっくりそのまま用いながら、それぞれの章の中にそれを上回るヒルデブラントのコメント、他の学者からの長い引用が挟み込まれている。『魔女小論』ではインスティトリス（クラマー）に限られていた悪魔学の言説が、ボダン、ガイラー、ヴァイアー、トリテミウス、モリトリスから引用されており、そして何よりも具体的なエピソードが大きくページを取っているのである。魔法に対する具体的な対抗措置や処方記述に乏しかった『魔女小論』とは違って、『ゴエティア』の特に後半は具体的な処方が大幅に追加されていて、より実用的になったと言える。いわばヴェッカーのコンパクトな『魔女小論』は寸断され大幅に膨らまされ、もはや別の作品と言えるほどに変形・増幅されて、それでもその骨格を失わずに拡散しているのである。

#### 4 『霊の楯』

これまで紹介した文献はその内容はともあれ古今の権威的著作を引用してその価値を高めることに意を用い、編纂者自身も名の通った名士であった。そして書籍市場でも流通し、それなりの成功を収めていたと言える。こうした本の読者はラテン語に堪能というわけではなく、一流の知識人というわけでもないが、都市を中心に形成されてきた新しい読者層、自然の不思議に興味を持ち、特に実用的知識を求める市民層だったであろう。ところでそうした読者を相手にした書物はやはり人間の周りの世界や宇宙の不思議について何らかの「説明」の枠組みを提供するものでもあった。たとえ個別的知識のカatalogに近いとしても、ヒルデブラントの『自然魔術』では冒頭に魔術（Magia）の名の由来から始まり、悪い魔術との区別が強調され、神の似姿としての人間、星辰と人間の体との対応などが語られて

いる。ヴェッカーの『秘密の書』ではやはり冒頭に学問の体系と扱うべき対象の分類が掲げられており、要するに両者とも対象の輪郭を描いて定義する姿勢が存在する<sup>(44)</sup>。そもそも百科全書的に対象を網羅するためには索引だけでなく知識の総見取り図で読者を道案内する必要があったのだろう<sup>(45)</sup>。読者の方も自然の秘密を知るためにはある程度知識の体系的性を求めていると思われる。とは言え特にヒルデブラントの『自然魔術』では上述の原理的な話は最初だけで、すぐに髪を染める方法といった具体的なノウハウの話に入っており、やはり個別の知識の寄せ集めという性格は拭えない。ただあちこちに当時の学術的著作の形式を踏んだ古典文献からの引用が散りばめられていることから、権威的著作の引用や体系の提示といった学術的体裁は読者へのアピールになったと見える。

ヴェッカーの『魔女小論』も魔女という存在を素描し定義することで魔女を理解し説明しようとする。この「説明」と「理解」、定義づけによって人間は魔女という不気味な存在を知的に統御できる。知識人層だけでなく『魔女小論』の読者層もまたこうした知的な統御の側に立っていたのではないか。魔女の特徴を網羅して簡潔にまとめたこの本によって読者は自らの魔女イメージを補強、補足していったであろう。

しかし都市を中心にしたこうした読者層の需要に応える本ばかりではない。印刷はされていても書籍市などで大っぴらに売られることはなく、大半は行商人の手によって販売されていたであろう別のタイプの書籍があった<sup>(46)</sup>。グリモワール、いわゆる魔術本に分類されるもので、この手の本の多くには出版者も記されていない。ライン河流域、アルザスでも出回っていたグリモワールの一つに『霊の楯』がある。正式には『300年前に教皇レオ10世によって承認され、あらゆる危険で邪悪な人間及び魔女術、悪魔の業に対抗する真性なる霊の楯。神によって啓示され、また一部は教会と教父によってしたためられ、認可された力強い祝福と祈りを含む。云々。』という題名になっている。ここで主に利用した1647年の版であるが、これは元々『レオ3世の便覧(Enchiridion)』として1525年にラテ

<sup>(44)</sup> Hildebrand, *Magia naturalis*, Bd. 1, Woher MAGIA den Namen habe ; Wecker, *De Secretis libri XVII*, Basel 1582, *Operis totius vniuersalis dispositio*.

<sup>(45)</sup> ヴェッカー編纂による初期の版『秘密の七書』にはこうした案内はなく、いきなり男性の若さを保つ方法や健康増進の飲み物の処方といったノウハウが紹介されている。Alexii Pedemontani, *De Secretis libri septem*, Basel 1568.

<sup>(46)</sup> オーウェン・デイビーズ『世界で最も危険な書物—グリモワールの歴史』柏書房(2010)。

ン語で出されたもののドイツ語訳である<sup>(47)</sup>。既に1584年にはフランス語訳が出ている<sup>(48)</sup>。内容は無病息災で災厄を避けるための祈りの文句を集めたものである。題名は版によって少しずつ違っており、認可したとされる教皇もレオ1世、レオ3世からレオ10世に変わっており、1647年の版ではウルバヌス8世となっている。

『便覧』は1634年に既に教会の禁書目録に入れられており、教会の目を逃れて密かに流通することになった<sup>(49)</sup>。この本の全貌を掴むのが難しいのは、多くの版による異同や流通形態だけでなく、所有者がなかなか手放したがるという事情にもよっている。この本を持っている者は秘蹟を受けることなく不慮の死を遂げるような目には遭わない、敵意を持つ者から守られる、また旅行中の安全が保障される、妊婦は安産等々の御利益があるという。他にも水無しで火を消すための祈り、魔女に呪いをかけられた人や家畜を救う方法、泥棒除けのまじないなどが書かれている。19世紀に農村・山村の調査に入った研究家が報告するところでは、この本は大切な家産として父から息子へと受け継がれており、またこの所有者はそもそもその所有自体を口外しないという。この禁書を引き渡すようにと聖職者が要求しても聞き入れてもらえず、またこの研究家が相当の報酬を提示してこの本を買い取りたいと幾度申し出ても、やはり拒絶されたとのことである<sup>(50)</sup>。

1647年に印刷された版の構成は5部のテキストから成っており、「魂の真なる楯」「ミサに出席する時の敬虔な祈り方」「水辺と土地の認可された祝福の文句、道中で出会う敵に対して」「霊の楯の見張り、昼夜の時間ごとに神に選ばれた特別の守護聖人」「付録：人間と家畜に対する危険から守るための敬虔なキリスト教徒が唱える祝福の言葉」という具合になっている。全体に何か筋立てがあるわけではなく、様々な祈りの文句を集めたひとまとまりの部分テキストがさらに幾つか寄せ集まってできている本である。したがって順

<sup>(47)</sup> Geistlicher Schild gegen geistliche und leibliche Gefährlichkeiten allezeit bei sich zu tragen, darin sehr kräftige Segen und Gebete, so theils von Gott geoffenbaret, von der Kirche und H.H. Vätern gemacht und von Urbano VIII. Röm. Papst approbiret worden, Trier 1647; Gérard Leser (trad.), *Bouclier Spirituel=Der Geistliche Schild*, Mulhouse 1990; Johann Georg Theodor Graesse, *Trésor des livres rares et précieux ou nouveau dictionnaire bibliographique contenant plus de cent mille articles de livres rares, curieux et recherchés, d'ouvrages de luxe, etc.*, t.4, Mansfield Centre 2005 (original: Paris et Dresde 1863) S. 164; Wanderer, S. 155-161. しかし1647年の出版ということになってはいるが、本文中にはより新しい年代を示す記述があり、筆者が利用した版の実際の発行年には疑問符がつく。

<sup>(48)</sup> Charles Nisard, *Histoire des livres populaires ou de la littérature du colportage depuis l'origine de l'imprimerie jusqu'à l'établissement de la Commission d'examen des livres du colportage, 30 novembre 1852*, t.1, New York 1968 (original: Paris 1864), p. 148-150; Graesse, S. 374.

<sup>(49)</sup> Adolf Jacoby, *Geistlicher Schild*, in: Hanns Bächtold-Stäubli (Hrsg.), *Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens*, Bd. 3, Berlin und New York 1981 (original: Berlin und Leipzig 1931), Spt. 566-567.

<sup>(50)</sup> J. Dornbusch, *Schildwachtbücher*, in: *Zeitschrift für deutsche Kulturgeschichte* 4 (1875), S. 447-448; 今日では商業印刷の市場に載って簡単に入手できるが、20世紀前半の時点でも特別な本として扱われており、一度譲渡の申し出を受けたルクセンブルク国立図書館も、所有者の要求があまりに高すぎるため入手を断念したという。Adolf Jacoby, *Heilige Längemesse: eine Untersuchung zur Geschichte der Amulette*, in: *Schweizerisches Archiv für Volkskunde* 29 (1929), S. 1-17 (hier S. 4).



序も版によって異同があり、例えば時間ごとに聖人を割り当てた祈りの章は版によっては末尾に付録として付けられているものもある。一方この本の元になった『便覧』のフランス語版には悪魔祓いにかかなりの部分を割いていて、ドイツ語版には見られない特徴がある<sup>(51)</sup>。このように同じ題名でも内容の異同があり、内容がおおよそ一致していても題名の異同があるといった具合にやや掴みどころのない地下出版物であると言える。1647年の発行年が記されたものだけでも複数の版があり、さらに18、19世紀にも確定できただけで五つの版が出版されている<sup>(52)</sup>。

「霊の真なる楯」の章には「常時身に携えておく強力な祈りの文句」という小見出しの下に「この祈祷は1540年7月14日に聖母の墓から発見された」とあり、これを唱えたり、唱えてもらったり、あるいは敬虔な気持ちで身につけておくと、窮地に置かれた時も聖母が側についてくれるのだという。また「霊の楯の見張り」には1日の時間を区切ってそれぞれに特定の聖人の加護を願う祈りの文句が1時間ごとに記されている。テキストは内容的にはどれもほとんど同じで、自分がこの特定の時間に死ぬならば、斯々の聖人が付き添って邪な霊に誘惑されないようにしてほしいというものである<sup>(53)</sup>。この部分は特に好まれたようで、この部分だけの別刷も出回っていた。

1647年版の最後の付録部分は様々な災難を避けたり幸運をもたらすための呪文集である。家を安泰に保って病気や盗みから守るために書きつける呪文、盗まれたものを取り戻す呪文、獲物に命中するように銃を撃つ呪文、牛から牛乳が盗られた時の呪文、喧嘩を鎮める呪文、歯痛を止める呪文等々に混じって、水を使わずに火を消す方法や咳止めの処方、果ては賭け事に勝つための方法まで書かれている。魔女や悪霊から家を守り、また魔法にかけられた人や家畜を救う呪文もある。ここでは魔女と悪霊は区別なく同義で使われていることにも注意を払っておきたい。どちらも生活に対する直接的な「危険」であって、その由来や説明、区別はどうでもいいのである。

この本が前章で紹介した書籍に対して大きく違っているのは、ここには「敵」という言葉は使われていても、その敵の輪郭を描き出そうという態度がないことである。この世の

<sup>(51)</sup> Enchiridion Leonis Papae serenissimo imperatori Carolo Magno in munus partiosum datum nuperrime mendis omnibus purgatum, Rom 1660.

<sup>(52)</sup> Wanderer, S. 161-163; 筆者が主に利用したのは前掲書及び次の版: Der wahre Geistliche Schild, so vor 300 Jahren von dem heil. Pabst Leo X. bestätigt worden, wider alle gefährliche böse Menschen sowohl, als aller Hexerei und Teufelswerk entgegengesetzt, s.l. 1647.

<sup>(53)</sup> Geistliche Schild-Wacht darinnen Einer Stund einen besondern Patron erwählen kann, in: Geistlicher Schild, S. 97-157.



敵つまり自分に敵対して訴訟を起こしたりする者、盗賊、喧嘩の相手等は現実の人間であるが、いつ誰がどうやって敵対してくるのか予測不能であることが不安を抱かせる。この予測不能性には此岸の力だけでは対抗できない。さらには悪魔であれ魔女であれ得体の知れない向こう側の世界からやってくる「敵」に対して身を守るためには、やはり向こう側の世界から自分を守護してくれる聖人、そして神の加護を請い求めるための祈りの文句が必要なのである。祈りの文句集という性格から当然と言えば当然であるが、これは徹頭徹尾直接的で実践的な防衛ノウハウ集であり、「敵」と距離を置いて観察・理解しようという姿勢は見られない。しかも特定の機会に際して危険を避けるために聖なる力をあちら側の世界から呼び出すという性格が濃厚であるため、それは祈祷集と言うより超常的な力を呼び出す呪文集と言った方がふさわしい。モノとしてのこの本自体の価値と合わせて、言葉そのものが持つ力への信仰が背後にあったことは明らかであろう。木材の窃盗をする者はこの本をそれぞれの時間に該当する聖人の前に立てかけておくと、その時間中安心して泥棒に励むことができたという<sup>(54)</sup>。

## 5 これからの課題

以上簡単に紹介した3つの文献はそれぞれ次元の違うものである。それにもかかわらずある基準点からは比較可能であるだろう。やや誇張して表現すれば、それぞれ1: 通俗科学の百科事典的ノウハウ集、2: 幸福の敵である魔女の簡潔なスケッチ、そして3: 実際に身を守るための呪文と言ってもいいであろう。それぞれの読者層は推測するしかないが、敢えて言えば、1: 自然の秘密に知的な興味を持ち、実践的なノウハウを求めながらも同時に伝統的学術文献の権威を認める人々、2: 信仰篤く学識はそれほどないが同時に魔女を客観視しようとする者、これには実際に魔女の容疑者と対決した在地の司法官も含まれる。ヴェッカーの『魔女小論』が引用する悪魔学書が『魔女への鉄錠』に限られているということも1とは異なる点であろう。そして最後に3: 日々の生活の危険を避ける直接的な方法を求める人々という具合に推測できようか。

悪魔学というものが悪魔や魔女を定義して自らの解釈格子の中に組み込み、表象地図の上に配置してこれを説明するものだとすれば、これは既に敵を自らの内で飼い慣らす試みでもあろう。何かを定義することはとりもおさずその対象を創り出し、かつ支配することだとも言える。ただそれは古代の自然学と神学の素養のある一部の知識人のみがなし得

<sup>(54)</sup> Dornbusch, a.a.O.

ることだった。紹介した通俗文献ではそうした姿勢は形骸化している。おそらくは都市を中心に広がってきた新しい読者層は、学術の権威は認めながらも読書に生きる者ではなく、生業を持ちそのための実用的知識を必要とする人々であり、彼らは通俗化された知識のパノラマを求めていたのではないだろうか。魔女解説本では古代文献の権威はまだ生きているが、感覚的に把握できる特徴を繋ぎ合わせて敵の輪郭を描き出すその仕方は経験的な観察という方向に傾いている。これは魔女という表象を感覚的に理解する必要のある人々に向けられたものである。世俗の司法権保持者への呼びかけと聖なる言葉による救済はこのことを示しており、在地の素人裁判官だけでなくおそらくはさほど学識のない在地の聖職者もまた想定読者であっただろう。これに対して第三のカテゴリーはかなり様相が違っている。ここでは生活の直接的な不安に対する直接的な救済策が提示されている。不安は不可知の領域からこちら側に侵入してくる可能性があるからこそ不安なのであって、たとえその不安に魔女なり悪魔なりの形を与えようとしているにせよ、予測不能なものに対してはこの世の手段では対抗できない。祈り、むしろ呪文が必要になるのはそのためである。

民間での魔女や卑近な魔術についての情報は、学者が書いた高度に専門的な議論よりは、自然現象とその操作についての断片化されたカタログ的知識、言わば通俗科学的書物が果たした役割が大きかったであろう。ルネサンスの隠秘哲学はまだ知識人のものであったが、魔女狩りが本格化する時代にはこうした通俗的な書物が求められ、また流通していた。こうした書物は版を重ねる途中で改変され、新しいものが付加されてさらに流通していった。そしてその書物自体が著者のオリジナルというより先行する文献の切り貼りとして成立したものが幾つもあったのである。テレはヒルデブラントを「抜け目のない強盗」だとまで断じているが、その当時大衆向けのベストセラーを生み出す人物は多かれ少なかれそうした性格を持っていたし、必ずしも倫理的に咎め立てされるような行為でもなかったことはここで再確認しておく必要がある。ヴェッカーとて例外ではない。だからある特定の傑出した著者の思想を表現した書物の内的論理とその影響力を問題にする伝統的な魔女の思想史とはまた違った視点で、情報の流通を媒介する書物を知識の流動の一時的な浮標として捉えることも必要であろう。

なお最後に付言しておく、魔術・魔女の解説や実践にかかわる書物は印刷されたものだけに限られない。印刷物のさらに下位の裾野には手書きで書き写された多くの書物が出回っていたと推測される。筆者もかつて災難を防いだり透視術を伝授する手書きのマニュアルに出くわしたことがある<sup>(55)</sup>。物質を表わす医学記号が散りばめられており、知識人の

<sup>(55)</sup> Fürstlich-Fürstenbergisches Archiv Donaueschingen, Abt. Superstitionalia, Beÿ Antoni Winterhaldens

書物から断片的な記号を抜き出して権威づけに利用したであろうことは明らかであるが、中身はごく卑近な魔術マニュアルである。たまたま当局に押収されて残っているが、こうしたものが水面下で流通していたのであろう。

屹立した悪魔学書とは違って思想史に名を残すこともないこうした通俗本から当時の観念を読み取る作業には多くの困難を伴う。本稿で試みに触れた書物とその周辺の事情についても確言できることはほんの僅かであり、分からないことの方がはるかに多い。今後はテキストそのものの広大な裾野に分け行っていくことが不可欠であるのはもちろん、流通についての実証的な研究も必要とされるだろう。

いずれにせよ実際に起こった魔女迫害の現場の知的環境を考えるには、魔女の隣人たちも、そして魔女を裁いた在地の裁判官も含めて、通俗的な書物を媒介に彼らなりに魔女のイメージを形成し伝えていった、その様相に目を向けることが、現実起きた魔女迫害と知的状況をつなげるためには不可欠であろうと考える。なぜなら公的裁判が始まる前に魔女と向き合っていたのは市井の人々であり、大都市の統治権者や領邦君主の官房から派遣された学識者でない限り、裁判権を保持する在地エリートもまた市井の庶民と多くの感覚を共有していたからである。

## 正誤表

(下線部分が追加あるいは訂正箇所)

p. 96

(14) Alexandre Dorlan, *Notices historiques sur l'Alsace et principalement sur la ville de Schlestadt*, t. 2, p. 202-203.

↓

(14) Alexandre Dorlan, *Notices historiques sur l'Alsace et principalement sur la ville de Schlestadt*, Colmar 1843, t. 2, p. 202-203.

p. 101

(31) Zweifel, S. 179-180. 実はこの本は1582年に禁書に指定されることになるが、その危険性を予感した著者で地図作者のジロラモ・ルッシェッリが架空の偽名を用いたのではないかという説が有力である。

↓

(31) Simone Pia Zweifel, Aus Büchern Bücher machen. Zur Produktion und Multiplikation von Wissen in frühneuzeitlichen Kompilationen, Berlin 2021, S. 179-180. 実はこの本は1582年に禁書に指定されることになるが、その危険性を予感した著者で地図作者のジロラモ・ルッシェッリが架空の偽名を用いたのではないかという説が有力である。